

民俗博物館だより

Vo1. XV No. 1

1988. 12. 1



▲オエモチ(ヒガンバナの根でつくるモチ)をまるめる [十津川村高滝]

目 次

無形民俗資料のビデオ収録報告抄

- (1)チバ表作り 1
- (2)藍 染 め 2
- (3)トチモチづくり 3
- (4)オエモチづくり 4

民俗資料聞き書き短信 —民具と伝承に関する報告—

- ㊥久米御懸神社の太鼓踊り絵馬について 5
- ㊦桜井市大福吉田富夫氏寄贈資料の「桶」について 7
- 民俗公園だより・お知らせ 9

無形民俗資料のビデオ収録報告抄

昭和63年度から、各地に残る伝統的な技術や祭礼で、継承してゆくことがむずかしく消えてなくなろうとする無形の民俗資料をビデオに収録する事業が始まりました。ここではその収録した内容について報告してゆきます。

(1) チバ表作り (棕櫚の履物表)

横山 浩子

チバ表とは棕櫚の若葉(シュウロのシンバ)を材料に作られる草履、下駄等の高級履物表のことである。

桜井市大福では明治中頃、東京練馬から職人をむかえて、それまでの竹皮表にかわって作られるようになったものといわれており、かつてはこの地域の主要産業となっていた。

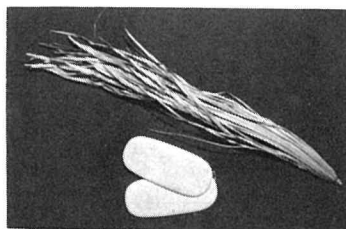
しかし、生活様式の変化による需要の減少等もあって、現在これを手掛ける製造元は県内でも1軒だけとなり、また近頃は材料のチバの生産(和歌山県)を続けることが困難になりつつある、とも伝えられている中で、これを継続するのは厳しい状況の様である。

○収録内容～チバ表作りの工程～

1. 原料の選別——材料のチバを品質の良し悪しにより選り分ける。
2. クスエ——チバを水で湿らせ、室に入れて硫黄で燻らせる。
3. 乾燥——室から出したチバを天日で干す。
4. チバヨリ——一房になっているチバを、葉の長さ、太さ、厚みなどにより3種類位に分ける。
5. 編み——藁草履を作る要領で、稲藁の細縄を芯にしてチバを編み込む。左右の縁には藁屑等で作ったガッポと呼ばれる芯を入れる。
6. 乾燥——編みやすいようチバを湿らせているので、天日で干して乾かす。
7. ヒゲカリ——編んだ縁部分にはみ出ているチバの葉先を切り落とす。
8. ガッポぬき——ガッポをひきぬく。

9. クスエ、乾燥
10. マネキ——マネキという道具で表を(シメキリ)はさんで表面を押して厚みを整える。
11. シメジ——前後の端の形を整える。
12. クスエ、乾燥
13. マネキ(中押し)
14. クスエ——水で湿さずに行なう。
15. マネキ——さらに薄くし、また表面(アガリ)の艶を出すために行なう。
16. ホシヌキ——はけで表面を掃除し、色の悪いところは抜き取る。
17. タタキ——鉄底になっている小判型の型に入れ、熱と圧力をかけて成形する。
18. セイリ——蒸気にあてながら、ハバマキという道具で横巾を、マキコミという道具で前後縁の丸みを整える。
19. タタキ——型に入れ、熱した鉄蓋で押えて、万力で圧迫する。
20. スジキリ——専用の鋸で表面にスジをつけて仕上げる。

チバ表作りは以上のような数多くの工程があり、かつては製造元が多くの職人、内職をかかえて分業体制で行なわれていたが、今では編み、シメジ等を除いて製造元自身の手でこれを行ない、さらに草履の形に整えるところまで手掛けている。(収録時間 約55分)



▲棕櫚のシンバ(上)とチバオモテ(下)

(2) 藍 染 め

横 山 浩 子

藍染めは、かつての庶民の衣生活を語る上に欠くことができないものであるが、現在では非常に限られたところでしか目にすることができなくなった伝承技術のひとつである。

宇陀郡室生村下笠間の井上紺屋は、かつてそこここに見られた村の紺屋さんの昔ながらの面影を今も残している県内唯一のところとすることができる。

○収録内容——藍染めの技法と紺屋の仕事

1. 仕事場の光景

藍甕を中心とする仕事場のつくりや道具等の配置状況、彩光の具合、守り神（愛染さん）の祀り方等、その全体の様子が把握できるよう留意して撮影を行なった。

井上さんの仕事場は、母屋の土間側手前（ソトニワ、もと牛小屋の位置を改造）を高くして、ここに4個を1組とし、中心に火壺を設けた藍甕が現在4組埋められている。最盛期には8組32個あったとのことである。

甕は作業が手順よく進められるよう古い染液の入ったものから新しいものへと順番に並ぶが、その様子は液の表面、そこに浮かぶ藍の花と呼ばれる発酵によってできた泡の色、形によって知ることができる。

新しい染液は液面が青黒く、藍の花は大きくきめ細やかで赤紫色をしており、これが古くなるほど液面は茶色くなり、花は小さく青紫色へと変化してゆく。

仕事場は適度な明るさを必要とするが、直射日光などは入らないよう窓に格子、障子をはめられている。

仕事場背面（奥側）柱上方に愛染さんがまつられており、またこの柱はかつて、布染めの際に布を叩きつけたところである。

2. 藍 建

藍建とは新しく染液を作る工程である。

原料のすくもを空の甕に入れて熱湯をかけ、これがさめた頃足を使って練る（藍踏み）。

次に甕一杯まで水を注ぎ、石灰を入れ、砂糖、小麦粉の水溶きしたもの等を加える。

またウチアイといって古い染液と互いに移し替えることなど行ない発酵を促す（夏2回、冬は3回行なう）。新しい液は実際に使用

できるようになるまで20日～1ヶ月程かかる。

3. 藍染め

糸染めを中心に収録。

まず糸を適量づつ総分けし、精練の工程を経て、染めに入る。古い染液から新しい染液へと順に浸けては絞ることを繰り返す。またその都度糸によく空気をふれさせ、色斑など出ないようにシャクル、チダマヲツク、サワクなどの動作を行なう。なお布染めの場合は、布を床（昔は柱）に叩きつける点が異なる。

また、五尺糸や布の場合、これが甕底のすくもにふれてよごれることのないよう、竹籠を沈めて蓋をする。これらの様子を合わせて収録した。

4. 藍甕の管理

藍は毎日の手入れを怠ると死んでしまう。

1日1回、染めの仕事が終わった後、カイを使って液を攪拌する。また液面に浮かぶ藍の花の様子等から液の発酵状態を見極め、必要に応じて石灰や砂糖、小麦粉などを加えて調整する。

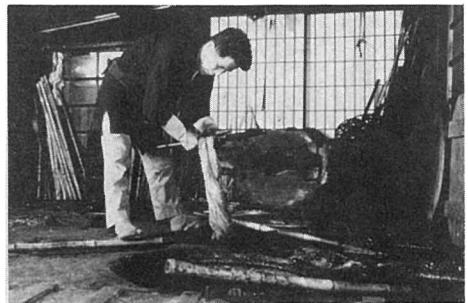
冬に入ると、夜間液が凍てないよう、火壺を使用する。仕事を終えた後、火壺の中に炭と粃殻を入れて燻べる。

5. 愛染さんのまつり

1月26日。紙で作った羽織と袴を新しい染液に浸けて仕事場の祭壇（簡単な棚）に置き、大根と御膳を供える（奈良県立民俗博物館日より Vol. IX No. 2 参照）。

以上、収録のあらましであるが、このうち3の布染め、4の火壺の使用風景及び5の部分は1988年1月26日に収録、これを除いては8月26、27両日に渡って収録したものである。

（収録時間 約1時間30分）



▲糸染め（室生村下笠間 井上富夫宅）

(3) トチモチづくり

浦西 勉

〔場所〕 吉野郡十津川村玉置川

〔協力者〕 松浦茂広（昭和8年生れ）

松浦町子（昭和6年生れ）

福本 幸（大正10年生れ）

玉置川は奈良県の最南端、和歌山県と接する村である。北部に玉置山（1076.4m）が、南に大森山（1078m）が存在しその谷間に玉置川が流れている。その川沿に人家が点在（ムコウジ・ウエジ・ウラジ・オータワムカイ）する。戸数14軒の山村である。生業は主に林業と若干の田畑を作る。この村はトチモチを特に好物としており、そのため、村人は橡の木を大切に保存する。他の村々ではほとんど伐採されており、少なくなったが、この村ではまだ伐採せず150本程あると言う。主にその場所は北又谷（その場所をオードチ山と言う）と松平（その場所をダケと言う）方面である。秋遠くからでも、杉・桧の植林の間に美しい紅葉をみることができる。杉・桧は山の地主の所有だが、橡の木は村人用として伐採しない慣習となっている。玉置川ではトチモチを作るのは、11月24日の玉置神社のまつりと、12月28日頃の餅つきの時に作る。次にトチモチができるまでの工程を示す。

- (1) 9月の彼岸頃からトチの実を拾う。木綿の袋をさげて谷へ拾いにゆく。風のよくふいた翌日など沢山拾える。
- (2) 拾ったトチの実を水に二晩つける。これはトチの実に入っている虫を殺すためである。
- (3) 庭や縁にムシロを敷いてトチの実を干す。1ヶ月程乾燥したうえで保存しておく。



▲(7)の水にあわしたのを川からあげるところ

- (4) トチモチを作る場合、保存してあるトチの実を1週間から10日間程水に漬けてもとに戻す。
- (5) トチの実の皮をはぐ。トチハギという用具ではいでゆく。昔はカナヅチで皮を割ることもあった。
- (6) ブリキのカンの中へ灰と煮えたぎった湯とを入れてかきまぜる。これを一番アクと言い、この中へ皮をはいだトチの実を入れ二晩つけておく。この一番アクの分量は、トチ1升到灰1升の割合という。なかなか難しいと言う。
- (7) 水にあわす。トチの実に一番アクが充分しみこんだものを、冷たい川水で二晩つけておく。こうするとにがみが水にとけてゆく。
- (8) 次にクイアクという灰のアクに一晩つける。クイアクは一番アクに比して灰は少ない目だが、かなり経験が必要で、モチにうまく搗けるか失敗するかいろんな場合が生じる。
- (9) 水に一晩あわせておく。
- (10) 試しぐいといって3、4個炊いて食べてみて、良いか悪いかを判断する。
- (11) トチの実と餅米をコシキに入れて蒸す。トチの実と米の分量は1対1がおいしいと言う。
- (12) モチツキ。タテウスでつく。
- (13) できあがりはお茶に入れてたべたり、アンを入れてたべたりするのがおいしい。

（収録時間。約1時間20分）



▲灰を作る。

(4) オエモチ (ヒガンバナの根の餅) つくり

浦西 勉

〔場 所〕 吉野郡十津川村高滝

〔協力者〕 田口重晴 (大正2年生れ)

田口政子 (明治41年生れ)

高滝の村は玉置山麓の北側に位置し、標高400mの村である。急な斜面に民家が点在する。この地方でヒガンバナの根のことをオエモチともマンジャクの根ともいいその花をオエモチの花と言う。畑のアゼなど土のやわらかいところに多くはえている。この根を使ってモチをつくり、食料の乏しい時代にはその足しにした。食料の乏しい時代を村人はキンドシと言う。多くは明治20年から30年代までと、戦時中であった。

次にオエモチをつくる工程を示す。

- (1) オエモチの花がしおれた時、根が一番大きいので、鍬かスコップで掘る。イモは3寸(10cm)ぐらい下に入っている。
- (2) イモのところだけカマで切って、イモの皮をむいてしまう。
- (3) このイモを、蒸すか、釜で炊くかどちらかにして、とにかくやわらかく、箸が通るぐらいに炊く。
- (4) 谷にもってゆき、水でかきまぜる。20分

から30分程。この水であくをぬく。

- (5) 川からあげて、たべて見てにがみがなければ、キネでついて(少ないときはスリコギでも良い)団子にする。
- (6) にぎって食べる。味のないものなのでミソを団子につけてたべる。あくぬきが不足すると、針がささるように痛いと言う。オエモチはキキンの時にぐらい食べるものであるが、食べた話はよく耳にする。その他、葛の根、ワラビの根、ウリ根(カラスウリの根)なども食料としたことがある。また、タラメ(ゆでてみそあえ)、リョウブ(ゆがく)、ウド、セリ、アマナ、ノビル(根を食べる)、ユキノシタ(葉をてんぷらにする。)なども食べた。(収録時間約40分)



▲オエモチつくり(ヒガンバナの根を洗う)

◇ ビデオ収録のすんだもの

62年度には上記の報告以外に次の無形民俗資料を収録しました。

棕櫚晒場作業

チバオモテの原料となる棕櫚の若葉(芯葉とも呼び、梅雨の後に出るものを採る)を集荷、煮沸して紀の川の河原で天日乾燥して、奈良県桜井及び埼玉県川越の履物表産地へ出荷する仕事が、和歌山県かつらぎ町東浜田で行なわれて来ましたが、人件費の高騰などのため最後の作業風景となる可能性が大となったため、チバオモテつくりの関連技術として収録。

タヌキの毛抜き

高級な毛筆の材料として使用される日本産のタヌキの荒毛を抜き、精選して出荷する仕事は今日国内では菟田野町岩崎のただ一軒のみになったということで、奈良筆の影で受け

継がれて来た地道な手技として貴重なもの。

鹿の毛切り

これも、筆や友禅染めの刷毛の主要な材料である鹿の毛を皮から切り取るという地味な手技、これに至るまでの鹿皮の加工工程とあわせて収録。

鹿皮のいぶし

武道具などに使う鹿皮の表面を黄色に染め耐久性等を高める技法は、藁の白煙の中で営まれる苛酷な仕事として国内で行なうのはめづらしい状況にある。

葛根堀り

有名な吉野葛の原料(葛根)を冬の雑木林で見つけて堀り出し、打ち砕いて沈殿をくりかえし、精製して吉野葛となるまでの工程を収録。

⑤ 久米御縣神社の太鼓踊り絵馬について

鹿谷 勲

奈良県の村々で、かつて最も盛んに演じられていた芸能の一つは太鼓踊りであった。その殆どは、雨乞いやその願いがかなった際に実施されてきたために、必要性が減ると大半が消滅してしまった。民俗芸能の基本的性格の一つでもあるが、単なる娯楽としてではなく村落で特定の機能を担っていたことをこのことは示している。

現在でも伝承されているものでは、毎年踊られるのは奈良市大柳生のものだけで、時折実施されるものとしては、都祁村吐山、吉野町国栖など僅かな例を数えるのみとなっている（以上三地区はともに県指定無形民俗文化財）。しかし、この芸能の広汎なかつての流行を示す踊り用具・歌本・絵馬等の資料はいまだ各地に残されている。これらの有形資料に加えて経験者からの聴取による総合的な関連資料の集積が、この芸能の実態を把握するために今後も続けられる必要があるが、中でも既に途絶した踊りのかつての形姿を最も如実に我々に伝えてくれるのが、太鼓踊り図絵馬である。早くこの種の絵馬の資料的価値を認めて岩井宏実氏は県内の太鼓踊りを論じているが^(注)、その後の発見も含めて同種の絵馬として現在筆者がその存在を確認しているものは、高取町に三面、明日香村に三面、橿原市に二面、平群町に一面、川西町に一面、安堵町に一面、合計十一面である。これを年代順に一覧表にすれば次の通りである。

この中で、最後の久米御縣神社の絵馬については、大正十一年刊行の『高市郡神社誌』において「(名車

手踊之図)(古色蒼然たるも文字なし)」と紹介されたにもかかわらず、その後も調査の手は及ばず、内容についてはいまだ未確認のみである。昭和六十三年刊行の新修『橿原市史』も同様の記述に写真を追加するにとどま

＜県内太鼓踊り図絵馬所在一覧＞

所在地	神社名	年号	銘
高取町下子島	小島神社	享保8年	(1723) 在銘
高取町下子島	小島神社	宝暦2年	(1752) 在銘
安堵町東安堵	飽波神社	宝暦6年	(1756) 在銘
明日香村橘	春日神社	文化元年	(1804) 在銘
高取町下子島	小島神社	文政4年	(1821) 在銘
川西町結崎	糸井神社	天保13年	(1842) 在銘
明日香村稲淵	飛鳥坐字須多岐比売命神社	嘉永6年	(1853) 在銘
橿原市木原町	耳成山口神社	文久元年	(1861) 在銘
平群町平等寺	春日神社	文久元年	(1861) 在銘
明日香村橘	春日神社	慶応3年	(1867) 在銘
橿原市久米町	久米御縣神社	不明(安政5年(1858)以前か)	



▲久米御縣神社太鼓踊り絵馬(全景)

っているため、今回その概要を報告し、県内の太鼓踊りの考察の一資料に付け加えることとする。

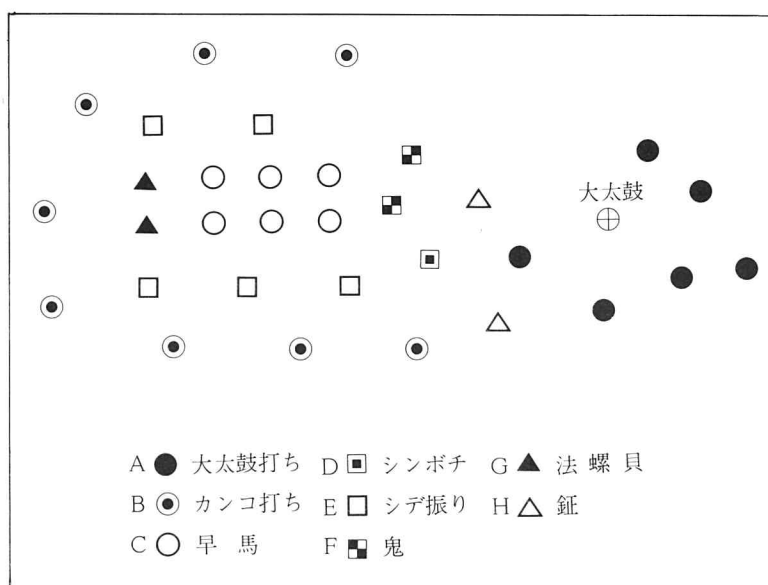
近鉄橿原神宮駅西方の橿原市久米町は、現在では静閑な住宅地域で、戸数約750戸を数えるが、旧村部は100戸足らず、慶長郷帳による村高は517石で、江戸時代を通じて旗本神保氏領であった。域内に久米寺があり、その南隣に氏神久米御縣神社が鎮座している。同社はもと久米寺の鎮守といわれ、近世はもっぱら天満宮と称されていた。太鼓踊り絵馬は本殿側に画面を向けて拝殿内に掲げられており、訪れる者も内部に足を踏み入れない限りこの絵馬には気付かない。

法量は縦126.8センチメートル、横160.3センチメートルで、四隅その他に飾金具を添えた額装を施している。横四材矧ぎの画面に斜め上方からの境内俯瞰の構図をとり、上端中央に現在の社殿と同一の春日造り本殿の屋根部を描き、雲形をはさんでその下に拝殿、下端中央に木製鳥居の上部、右端に手水舎と石灯籠を描いており、灯籠の配置等を除けば境内の状況は現在と異なる所はない。

画面右側中ほどには、台付きの大太鼓の周囲を、二本のバチを振り上げて右回りに踊る若者六名が描かれている（図中A）。大太鼓の胴には御幣が取り付けられている。頭には赤いシャグマを被り、裃装束に身を固めて

いる。大太鼓の傍には、頂上と縁に房のついた円錐形の帽子を被り、先が二又になった撞木で二連式の小鉦を叩く少年二名がいる（図中H）。この鉦叩きのやや左上方に、大きな赤鬼面とシャグマを被り、腰に瓢箪を吊り下げた鬼役が、先に房の付いた棒を振り上げて踊っている（図中F）。その左側（画面中央）には大太鼓打ちと同様の装束に揃いの花笠を被り、三人ずつ二列に並んで前かがみになって小太鼓を打つ少年が描かれている（図中C）。さらにその左側には、羽織・タツケ袴姿で法螺貝を吹く男二人が並ぶ（図中G）。頭には頂に御幣を取り付けた笠を被っている。これらの一団のまわりを、シデを採って右まわりに踊る男達五名（図中E）とさらにその周囲をカンコを打つ者（図中B）がぐると馬蹄形に取り囲んで踊っている。大太鼓のすぐそばにもシデを手にした男が一人いるが（図中D）、こちらは他のシデ振りと衣装は異なり、裃装束で笠も一人だけ違うところから、踊り全体の指揮をとる、いわゆるシンボチと考えられる。カンコを打つ者は裃装束にタツケ袴で腹部に小型のカンコをつけ、シデの束と珠を三段に飾りつけた差し物を背負い、頭には鉦叩きと同じ被りものをつけるなど最も華やかな扮装をしており、両手のバチを振り上げながら踊る様が生き生きと描写されている。役割別の名称はこの絵馬のみで

は知られないが、「大和国高取藩風俗問状答」にみられる「南無手踊」（太鼓踊）の記述に従えば、当地の「名牟手踊」は大太鼓を打つ「頭太鼓」・少年の演じる「早馬」・シデを採る「中踊」・カンコを腹につける「腹太鼓」を中心に編成された踊りといえ、ここでは笛吹きや独立した歌うたいは見られないが、大和の太鼓踊りの基本的な構成要素をほぼ踏襲したものである。画



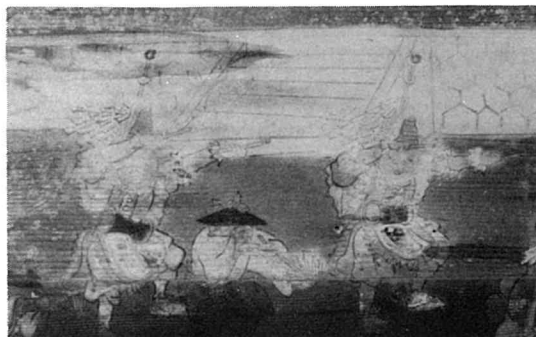
▲久米御縣神社太鼓踊り絵馬の概念図

面全体に剥落はみられるものの、華やかな異国風の扮装もよく窺え当時の風流踊りの実態を描き伝える好例である。

本絵馬には墨書銘は現状では発見できず、製作年代を確定できないのが惜しまれるが、拝殿前の安政五年(1858)在銘の石造狛犬が、いまだ描かれていないことから、一応それ以前の奉納としたい。鳥居付近にはつめかける見物人の後頭部のみを描き、拝殿では重箱などを広げて踊りを眺める人々や掲げられた絵馬群を描き込んだりしている写実的な技法からもこのことは妥当であると思われる。

(注)「大和の太鼓踊について」(『大和文化研究』第13巻第3号 1986) 他

(奈良県教育委員会文化財保存課勤務)



◀カンコ打ち(両側)と
シデ振り(中央)



◀大太鼓打ちと鉦叩き(左上)

桜井市大福

6

吉田富夫氏寄贈資料の「桶」について

浦西 勉

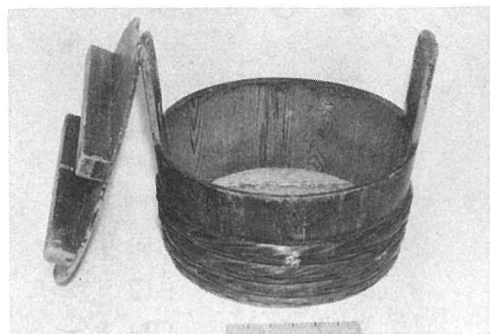
徳田 陽子

桜井市大福横内の吉田富夫氏から多数の民具の寄贈を受け、今整理途中である。そのうち、桶類(オヒツ・桶の蓋なども含め)が63点に達しており、一家における桶の存在がいかに多かったのかを思わせる。その中には、水汲み桶、醤油桶、風呂桶などが見あたらないので、まだこれ以上の桶類が日常生活には必要であったことがうかがえる。ここに収集した桶の一覧を紹介しておくことにする。

これらの桶は、吉田家の母屋の中庭を隔てた、ナヤ(農機具などおく)の東すみの部屋(ミソ部屋か)に多数あった。その部屋は2間と3間程の広さで二階になっており、その一階に集中しておかれてあった。収集時、ツノのあるオケ〔登録番号4163〕にはモミガラが底から3分の1のところまで、入っており、これは桶の保存方法の1つかとも思ってみた(しかし実際長年放置していたため虫穴が甚だしかった)。また、オヒツは新聞紙につつまれており、美しく保存されていた。その他の桶も概して美しく保存されており、重ねて言うようだが、一家に存在していた桶を考える上で大切なように思う。また、このような

桶の中に、竹のタガとハリガネのタガの存在がある点や、柁目の桶、板目の桶などそれぞれ考えてみる必要が多数あるように思う。ここには、特に記しておきたい桶についてのみ報告しておく。

- (1) ツノのあるオケ：使用方法是不明であるが、『日本民俗資料事典』(32ページ)に写真入りで紹介されているのには飯櫃となっているものと同型である。しかし、この吉田氏の桶は、スシ用のような気がするがどうであろうか。〔登録番号4163〕



▲ツノのあるオケ

(収集時にモミガラが入っていた)

(2) コシキ：モチ米を蒸したものであるが、
 枳目の桶に布とシブ紙が張られている。ヘ
 チマなどをこの穴にのせて、カマの上でモ
 チ米を蒸したもの。使用年代は明治前期か、
 それ以前のものと言う。これをみると、桶
 とシブ紙の間に藤か麻の布をはりつけてあ
 る。〔登録番号4162〕

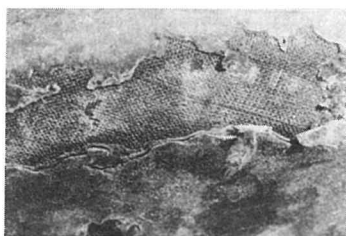
(3) 大型の桶：これらは何に使用したのか不
 明であるが、かなりしっかりしている。一
 時的に米を保管したり、米を洗ったりした
 ものであろうかと思う。良質の杉材が使わ
 れている。

(4) 清[セ]の焼印のある桶：吉田家の屋号
 はカネセと言っており、桶の底にこの焼印
 がある。かって代々「清」（清五郎・清三）
 のつく人が多かったのである。清五郎氏は
 三代前と五代前、清三氏は四代前にあたる
 人。

(5) 吉田清五郎の墨書銘：この吉田清五郎氏
 は今のご当主の三代前にあたる人で、この
 ことからこの桶が70年から80年前の明治中
 期ごろまでたどりうる。このことは、その
 他の多くの桶の時代も考えられる材料とな
 る。



◀コシキ(桶に布と
シブ紙が張られて
いる)



◀コシキ
(細部)

桜井市大福 吉田 富夫氏 寄贈 ■ 桶 一 覧 表

登録番号	資 料 名	法 量			備 考	登録番号	資 料 名	法 量			備 考
		高(cm)	直径(cm)	重量(kg)				高(cm)	直径(cm)	重量(kg)	
4140	オ ケ	28.5	66.7	7.8		4171	オヒツ	蓋 4.8 17.7	23.7 21.0	1.1	
4141	オ ケ	30.0	40.8	2.5	清	4172	オヒツ	蓋 4.1 18.3	26.4 22.1	1.0	
4142	オ ケ	21.1	50.5	3.1	清	4173	オヒツ	19.4	28.2	1.0	
4143	オ ケ	39.3	50.0	3.7		4174	オヒツ	20.8	30.4	1.0	
4144	オ ケ	22.1	55.2	3.2		4175	オヒツ	蓋 3.2 17.2	23.7 25.5	0.95	
4145	オ ケ	29.0	38.4	2.4		4176	オヒツ	蓋 4.0 20.3	25.9 28.8	1.4	
4146	オ ケ	27.8	36.5	1.9		4177	オヒツ	蓋 4.0 23.4	31.0 31.2	1.5	
4147	オ ケ	26.0	27.6	1.1		4178	オヒツ	20.0	29.4	0.8	清
4148	ミソオケ	52.0	31.0	2.95		4179	オヒツ	20.5	30.8	1.0	
4149	オ ケ	20.3	35.0	1.5	清	4180	タライ	23.5	58.5	4.4	
4150	テオケ	45.7(23.3)	28.7	1.2		4181	オ ケ	41.4	74.7	11.8	
4151	オ ケ	42.4	68.0	6.9		4182	オケのフタ	4.5	38.5	0.7	清
4152	オ ケ	22.5	38.5	2.35		4183	オケのフタ	3.5	47.1	0.85	清
4153	オ ケ	20.9	37.4	1.6	清	4184	オケのフタ	4.9	45.9	0.75	清
4154	オ ケ	19.5	53.9	3.2	清	4185	オケのフタ	2.7	21.5	0.15	清
4155	オ ケ	38.6	44.5	2.8	(底がなし)	4186	オケのフタ	0.6	29.6	0.2	
4156	オ ケ	39.8	25.9	2.1		4187	オケの底板	1.5	44.8	1.0	
4157	オ ケ	32.0	34.0	2.6		4188	オケの底板	1.9	60.8	1.1	
4158	テアライオケ	23.5	32.0	1.2		4190	オケのタガ(竹製)	4.8	38.5	0.3	
4159	ミソオケ	62.5	39.0	7.2		4191	オケのタガ(竹製)	1.0	35.6	0.1	
4160	オ ケ	53.3	40.5	3.7		4192	オケのタガ(竹製)	2.2	41.0	0.1	
4161	オ ケ	52.5	51.5	6.6		4193	オヒツのフタ	4.5	23.0	0.2	
4162	コシキ	32.2	26.8	2.2	桶で作られた コシキ つのだる形で ある	4194	オケのフタ	7.3	77.2	3.0	
4163	オ ケ	55.0(31.5)	63.3	10.4		4195	オケのフタ	5.3	80.0	3.4	
4164	フ タ	7.5	65.1			4196	タ ル	74.5	46.5	2.2	
4165	オ ケ	35.2	35.8	1.9	(底板なし)	4197	オケのフタ	5.8	74.1	2.2	
4166	オ ケ	42.0	73.5	9.3		4198	オケのフタ	4.4	78.3	3.2	
4167	オ ケ	58.2	60.5	6.7		4103	オ ケ	23.0	42.0	2.4	
4168	タライ	29.3	71.2	6.7		4104	オ ケ	19.0	32.0	2.8	
4169	オ ケ	38.1	65.6	7.4	吉田清五郎 (底墨書)	4105	オ ケ	39.5	53.0	2.3	
4170	オ ケ	41.1	50.9	3.3		4100	オ ケ	40.0	26.5	2.2	
4171	オ ケ	32.4	43.8	2.9	清						

大正八年五月
松本達市郎

民俗公園短信

自生樹木の花

4月から6月にかけては花の多い季節です。園内でもキリシマツツジやヒラドツツジは勿論のこと、自生の樹木の多くが花を咲かせます。ツツジの仲間では、ミツバツツジに始まりヤマツツジ、モチツツジなどが咲きます。バラ科の植物ではキンキマメザクラ、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、それにザイフリボク、カマツカなどが林内に可憐な花をみせてくれます。ザイフリボクの名前は采配からきていて、紙細工のような白い花びらが風にゆれます。カマツカは別名ウシコロシとも呼ばれ、鎌の柄や牛の鼻輪に使われたことによります。材質が堅くて弾力性があるのでしょう。今はもうみられない日常の生活、生産用具と深くかかわっているカマツカも可愛い白い花をつけます。



▲ カマツカ

公園内の自然林には、特にコバノガマツミがたくさんあります。林縁にみられる白い花は初夏のすがすがしさを与えてくれます。集まってつける小さな赤い実は小鳥たちの格好の食物となります。また、人間たちの果実酒の材料にもなります。



▲ コバノガマツミ

このほかに数多くみられるものとして、ネジキがあります。ネジキの樹幹は、ねじれたように樹皮が巻きます。見れば、「なるほどこれはネジキだ」と一目瞭然の名前です。園内の地味が比較的酸性が強いのか、ツツジの類が多く、ネジキもツツジ科のネジキ属に入ります。花は白く、壺形で、近縁種のアセビの花によく似ています。若枝は紅くツヤがあって、落葉したあとの冬季にはよく目立ちます。

自生樹木の花もよく見ると、園芸樹木にまけない可憐な美しさをもっています。

(横村光司)

***** お知らせ *****

民俗資料の収集にご協力を

■ こんな資料を集めています。ご連絡ください。

奈良県立民俗博物館では、郷土の風俗、慣習及びこれに伴う生活用具等で生活の推移の理解に欠くことのできない資料(民具)を集めています。特に、

(1) むかしの仕事に使われた民具

① 吉野山地で使われた山の道具

吉野の山村の社会変化や水没などにより、急速に失なわれつつある山の道具。

② 奈良県内で使われた農耕具

機械化の進まなかった時代の民具。農業の急激な変化により失なわれてゆく。

③ 職人の使った道具

手仕事によって作られた昔の道具で今日急速に姿を消している。

(2) むかしの社会生活に使われたもの

村落社会の急激な変化に伴って捨てさられようとする民具。

村落の共有道具・贈答・社交用具。

(3) 当館の基本的資料の充実

地域的・歴史的・類型的な相異により収集衣・食・住に関する民具。

はたおりに関する民具。

川魚とりに関する民具。

運搬具 など。

連絡先 奈良県立民俗博物館

大和郡山市矢田町545

☎ 07435 (3) 3171